

「右—左ではない上—下が問題」という錯誤

ユーチューブを見ていたら、野党党首の街頭情宣というか対話集会の様子が出てきました。かねてから、「自分たちは右でも左でもない」と言っていたのですが、それに「右か左かが問題なのではない、上と下が問題なのだ」とか言っていました。その言い方は、リベラルな学者からも出ていたのです。

右と左とは何か

最近、差別とか、格差とか、平和とか言うと、「ネトウヨ」から「左翼」規定されるらしいのですが、そもそも、右か左の規定があいまいになっているから、混乱が起きているのです。冒頭に書いたことですが、上と下ということは格差とか言われること、もっと幅広くとらえると差別の問題なのです。で、それをどうとらえるのか、どうするのかこそが、左か右かの問題なのです。上と下の関係をなくそうとするのが左。上と下の関係を小さくしようとするのがリベラル。上と下との関係をそのままにしようというのが保守。上と下の関係を固定化・拡大させようとするのが右派。上の下への支配を強調するのが極右・ファシストということになります。これについては図式化の弊害ということを意識しつ、敢えて図式化した論攷を前号で書いたのです、参照してください。

[https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-](https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e_41db689a1a9e4808b4e52aca4dd7eea9.pdf)

[62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e_41db689a1a9e4808b4e52aca4dd7eea9.pdf](https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e_41db689a1a9e4808b4e52aca4dd7eea9.pdf)

図表が小さいので大きい版も見てください。<http://www.taica.info/adsnews-186rlf.pdf>

ポピュリズムとは何か？ 左派ポピュリズムはありえない

さて、ポピュリズムとは一体何なのでしょう？ それは政治的に自分たちのグループの支持を上げ勢力を拡大するために、大衆の意識に迎合することです。それは右派ポピュリズムでは、差別的感情に依拠して、それを煽り、勢力を拡大することを意味します。その手法として、「騙す」ということも厭いません。そもそも、戦後保守・右派政治が、そしてとりわけ、安倍元首相が虚偽答弁を 118 回なしたと報告されているように、安倍政治以降政治家の資質は、「平気でうそをつけること」となった感があります。

さて、右でも左でもない自己規定するひとは、確かにポピュリズム的存在なのですが、左のポピュリズムというのはいくらもありませんか？

少なくともマルクス／エンゲルスにはポピュリズムということはいくらもありませんでした。

そこからすると、左派ポピュリズムはありえないことで、左派ポピュリズムという存在矛盾なのです。右でも左でもないとだまらかしを言って、右に誘導するのが右派ポピュリズムで、右でも左でもないとだまらかしを言って、左には誘導できないとなるのです。「右でもない左でもない」というひとは、右や保守でありえても少なくとも左ではないとなるのです。「左派ポピュリスト」と自称するひとは（ポピュリストとは嘘つきだという規定できるので、表立ってポピュリストを自称するひとはいないのですが）、左派性を棄てたひとなのです。「左派ポピュリズムはありえない」となります。

但し、アーレントのファシズム規定の中で、むしろファシズムとナチズムを「全体主義」規定の中に包含する事態ができました。

アーレントの「全体主義」規定

そもそも、アーレントはスターリン主義の「一国社会主義論」的支配体制を全体主義と規定したのですが、この概念は曖昧です。アーレントは、そもそもロシア革命で、社会主義が定立したとしたようなのですが、ロシア革命が労農独裁から、それが農を支持基盤にしていた社会革命党の離脱・排除で一党独裁になり、世界的白色介入もあり、新経済政策を導入した時点で、社会主義への移行に失敗したと押さえることだったのだと思います。事実、レーニン自身が、新経済政策を、「これは国家資本主義だ」と規定しています。そもそも、レーニンはマルクスの左派的展開を、幾重にも踏み外しています。「労働者の解放は、労働者階級自身の事業である」「(プロレタリア独裁の) 革命政府において、出来合いの機関をそのまま使えない」ということを、レーニンは「現実主義」ということで、外部注入論や秘密警察の設置ということでも踏み外したのです。また、レーニンの民族問題に関する方針で、レーニンは意図的に騙すつもりはなかったのですが、「民族自決権」はウクライナを停戦のために「ブレスト＝リトフスク条約」でドイツに譲渡したのです。そもそも、レーニンの中央集権制という反差別論的に矛盾することは、民族自決権とアンチノミー（二律背反）になるのです。

アーレントのスターリン主義に対する、そしてそこからするファシズム総体への「全体主義」規定は、スターリン主義的国家の「社会主義の定立」を前提にしている錯誤です。そもそも共産主義へ至る社会主義は「全体主義」にはならないのです。「一国社会主義」という排外主義的国家主義、他国を従属させる「社会帝国主義」に陥ったところで、内実は国家資本主義というゲゼルシャフト社会のエゴイズムに陥っていったのです。社会主義などにはなりえない全体主義対個人主義という対立概念からすると、疑問を持たざるを得ません。ファシズムには差別主義というエゴイズムがあります。それは、これも錯誤ですが、「社会という総体のために個人が奉仕する」という構図にもなりません。「社会」ではなく、「国家」（ここで、「国家」にカギ括弧をつけて「国家」としているのは、国家を超える高次の共同幻想体、「第三帝国」とか「大東亜共栄圏」とかがファシズム的に突き出されることがあるからです。）という幻想共同体が先にきて、「国民」がその「国家」のために死ぬる国民になることを強いるのです。これは日本の極右の主張と重なるのです。もう一つ、「全体に奉仕する・全体のために死ぬ」ということの錯誤は、そもそもファシストの党の上層部は、権力闘争を展開していて、自分が国家のために奉仕するとか謂うようには動いていません。党员たち、上層部に行けばいくほど、自分の立身出世のために党幹部に忖度・おべんちゃらを繰り返して行くのです。まさにゲゼルシャフトの世界です。トランプ政権での閣議の様子が映像として流れていましたが、順番に忠誠を誓わされるようにおべんちゃらを言わせられていました。そこでの「全体の利害」は国家＝幻想共同体としての虚構の利害に過ぎません。一般の党员のエゴイズムの利害の追求もナチス政権の台頭と

崩壊を描いたフィクションですが、クラウド・コルドンの「ベルリン三部作」、**「たわしの読書メモ・ブログ 615～617 / ・クラウド・コルドン / 酒寄進一訳 岩波書店(岩波少年文庫)2020」**（「反障害通信」131号所収 <http://taica.info/adsnews-131.pdf>）に明らかです。

ですから、アーレントのファシズム総体に対する「全体主義」規定は、「(共同幻想としての) 国家主義的・超国家主義的全体主義」規定として見直される必要があると、わたしは押さえています

戦争とファシズムの隆起に対決するために

そもそも、右—左規定が問題になるのは、右派ポピュリズムの台頭ということやファシズムの隆起の中で、右左の規定をはっきりさせる必要があるからです。

そもそもポピュリストは往々に、ファシズムの中身としての国家主義と差別主義に飲み込まれていくのです。というよりも、右派ポピュリズムはファシズムへの誘導的存在として出てきているのです。

もう一つ押さえておかねばならないことは、「右—左ではない上—下が問題」と言っているひとたちがファシズム批判のなかみとしての国家主義批判をなしえていず、「国益」や「国賊」という言辞を使っているし、もうひとつの中身としての反差別とすることをきちんと突き出していず、未だに障害差別の差別語を使っていることもあります。

ファシズムに対峙するために、その中身としての国家主義と差別主義にきちんと対峙するためにも、上—下ということ、差別の問題としてはっきりさせるためにも、右—左の規定をきちんとしていかななくてはいけないのです。

(み)

(「反差別原論」への断章) (115) としても)